

消化器外科レジデントマニュアル 第2版

小西文雄 監修

自治医科大学附属さいたま医療センター一般・消化器外科 編著

＜書評者＞ 志田晴彦（東京厚生年金病院外科部長・副院長）

2005年に発刊された『消化器外科レジデントマニュアル』が待望の改訂を迎えることになった。この間に多くの外科レジデント、研修医の必携の書として彼らを育てた実績をもった改訂である。不肖私が『外科レジデントマニュアル』からさらに一步消化器外科へ進む本”として本書初版の書評に記したように、日進月歩の外科分野のマニュアルとして改訂にはたいへんご苦労があったものと察する。実際にこの第2版を見ると、小西教授のもと自治医科大学附属さいたま医療センター一般・消化器外科のスタッフが、最新の情報を求めながら日々診療されているご苦労がそのままマニュアルに反映されていると感じた。それぞれの項目で5年間の新しい知見が盛り込まれているが、特に「内

視鏡下手術の基本」「stapling deviceの種類と使い方」の項や、各種の消化器癌取り扱い規約やガイドラインなどの更新に応じたそれぞれの章での改訂に医局員のきめ細やかな配慮が印象的である。

私自身も若い頃から小西教授には多くのご指導をいただき、また教授が大腸癌や炎症性腸疾患の診療、研究に熱意をもって立ち向かわれ、さらにその後腹腔鏡手術の発展に主導的立場で貢献され、今日の消化器外科を作り上げてこられた経過を目の当たりにしてきた。開腹手術で名を挙げってきた多くの先輩たちの中にあって、当初より腹腔鏡手術の将来を見据えた立場でのお仕事は、科学に常に新しいものを求める教授の姿勢の現れであり、真に敬意を表するばかりである。教授の信念が医局の先

生方に浸透して教室として数多くの優れた実績を挙げてこられたものと思うが、中でもこのマニュアルはその小さな形に比して存在意義は極めて大きいものといえよう。

今日、多くの外科系学会では「外科医を志望する学生の減少」「女性外科医が働けるための環境づくり」「専門医制度の意義」などが強調されている。厳しい課題が山積みな外科の世界ではあるが、問題の解決と発展のためには若手外科医の指導、育成が基本であることは自明である。このマニュアルが研修医、レジデント、ならびに時間的制限から経験のみに頼りがちになる医長、部長クラスの指導医にも引き続き必携の書であり、若手の育成を通じて外科学の発展に貢献するものであることを確信している。

●B6 変型 頁 368 2009 年
定価 4,410 円
(本体 4,200 円＋税 5%)
[ISBN978-4-260-00851-8]
医学書院 刊